

Contents of No.1

巻頭言	創刊にあたって	大津昭浩.....	p.1
トピックス①	関市ゆかりの俳人 広瀬惟然の フランス語訳された俳句について	内海春代.....	p.2
トピックス②	「神宿る島」沖ノ島と 関連遺産群を界遺産に	平松秋子.....	p.3
近況報告①	私立図書館「本庫 HonCo」 -ハコ作りから開館に至るまで	天雲成津子...	p.4
近況報告②	(この記事は非公開です)	p.6
近況報告③	最近見た展覧会の話題	新井恭子.....	p.7
研究情報	電子書籍の引用について	諏訪敏幸.....	p.8
お知らせ・編集後記		柏倉康夫・志藤聡子.....	p.9

// 巻頭言 //

創刊にあたって

大津昭浩

放送大学情報化社会研究会会報の創刊にあたり、ご挨拶させていただきます。当会はさまざまな立場の会員を擁し、研究、研鑽、交流の場となることを目指しています。会員の研究成果をまとめた『情報化社会・メディア研究』誌の発行は、これまでに11巻に達しておりますが、これに加えて、会員間の情報の交換のためにメーリングリストを運営し、会のホームページには、これまでの活動を記録したアーカイブの機能を今春追加しました。これらの維持・管理はすべて会員の手で行っています。

その上で、今回新しい取り組みとしてスタートしたのがこの「会報」です。「会報」の新味は、会員が取り組んでいる事柄を、途中経過の形でも取り上げていくことができる点です。それにより各自の研究に資する情報が得られ、さらに会員相互の情報共有につながることを期待されます。

機関誌はもっぱら研究成果を世に問う場ですが、「会報」は各自の日々の取り組みを紹介する役割を持ち、メーリングリスト上での情報交換以上に、各自の研究の方向や研究の現状を詳しく伝えられると思います。そこから会員相互の情報提供が盛んになることが期待されます。また会員の皆さんの近況を知ることが、会のさらなる活性化につながると信じます。みなさまの積極的な情報発信をお願い致します。なお会報は今後隔月で発行の予定です。

(会長 大津昭浩@神奈川)



//トピックス①//

関市ゆかりの俳人 広瀬惟然のフランス語訳された俳句について

内海春代

江戸時代、美濃国武儀郡関村(現岐阜県関市)で生まれ(1648年?)、関村で亡くなった(1711年?)俳人広瀬惟然は一般的には惟然(いぜん)と読むが、関では親しみを込めて「いねんさん」と呼んでいる。別号は、素牛、鳥落人、風羅堂、湖南人、梅花仏。

惟然は40歳近くになり、梅の花が落ちるのをみて世の無常を感じ妻子を捨てて仏門に入ったといわれている。その後、松尾芭蕉が「笈の小文」の旅を終えて大垣、岐阜に逗留していた時、初めて会いに行き弟子になった。惟然42歳(1690年)のころ、芭蕉が「奥の細道」の旅を終え大津の幻住庵に入ったころから随従している。

芥川龍之介の「枯野抄」には芭蕉臨終のときの惟然坊が描写されている。芭蕉没後は「奥の細道」の逆順を旅し、筑紫や奈良、京、江戸、三河、播州などへ放浪の旅をしていたが、晩年は関に帰郷して弁慶庵で命終した説が有力である。

関市立図書館では、郷土の偉人として、惟然関係の資料を特別に収集している。その中に惟然の「しぐれけり走り入りけり晴れにけり」という一句が、フランス語に訳され、ソプラノとピアノの歌曲になっている楽譜のゼロックス複製物が大事に保存されていた。資料的というより情動的な価値はあるが、どのようにして入手して、どのような意味があるのかはよくわからず、そのまま時間が過ぎていた。

2015年2月に知人がフランスの楽譜専門店3か所を探し巡ってこの楽譜の原本(Georges Migot “7 petites images du Japon, Tirées du cycle de Heian (IXe siècle) pour chant avec accompagnement de Piano” 1917)を手に入れてくれたことで、ようやく事態が動き始めた。

当初はこの楽譜をもとに、関市民の音楽家を通じてコンサートを開催することのみを考えていた。しかし、芭蕉の弟子でもマイナーな惟然の、没後発行の『惟然坊句集』に載っているが出所不明とされる俳句が、なぜ、どのようにしてフランス語に訳され歌曲にまでなったのか、興味が出てきた。

楽譜の複製物は、関市在住の市井の惟然研究者である沢木美子さんが、伊丹市の柿衛文庫からいただいたものであった。日本有数の俳諧コレクションを所蔵する柿衛文庫に問い合わせると、同文庫が所蔵する芭蕉と同時代の俳人上島鬼貫の俳句がフランス歌曲になっていたことから、俳句の日仏文化交流を研究している柴田依子さんが訪問されてご縁ができたとのことである。そして惟然の楽譜も、柴田さんがフランス国立図書館でコピーしたものを、柿衛文庫から沢木さんを通じて図書館に寄贈されたということがわかった。

柏倉先生に相談してご指導いただき、明治時代に来日した Michel Revon(ミシェル・ルヴォン)が、惟然の該当句をフランス語訳したことは確認できたが、柏倉先生によれば、Migot(ミゴ)の歌詞は、Revon の訳と似ているようで詩的にはだいぶ異なるという。完全一致の訳への道筋を見つけて、歌曲のコンサートと柏倉先生の講演を関市で開催したいと計画している。

(内海春代@岐阜)

//トピックス②//

「神宿る島」沖ノ島と関連遺産群を世界遺産に

平松秋子

「神宿る島」沖ノ島と関連遺産群は今年、平成 27 年 7 月 28 日、国内推薦候補に選ばれました。今後は日本政府からユネスコ世界遺産センターへ推薦書が提出され、2 年後に世界遺産登録となることが大いに期待されます。

沖ノ島を世界遺産にしようという運動は、今から 13 年前の平成 14 年 11 月に始まりました。宗像大社と RKB 毎日放送の提案で、早稲田大学・吉村作治教授他 2 名、地元福岡大学・小田富士雄教授、佐賀大学・佐田茂教授、大田可愛宮司によるシンポジウムが宗像市内で開かれました。テーマは「海の正倉院沖ノ島～いま蘇る太古のロマン」で、これが「沖ノ島世界遺産実行委員会」設置に向けた出発点となりました。シンポジウム会場には大勢の市民が集まり、登壇したパネリスト達もその熱心さに感心されたほどでした。その後、平成 16 年には、「沖ノ島物語実行委員会」が設置されて運動が本格化しました。そして、日本政府が「沖ノ島遺産群」を暫定リスト候補に決定し、ユネスコに提出。平成 21 年にはユネスコ世界遺産暫定リストに記載され、今回ユネスコ世界文化遺産登録国内候補となりました。

私が運営委員として参加している宗像電子博物館は、平成 17 年 5 月にネット上に開館されて、今年でちょうど 10 年を迎えました。電子博物館は実物を展示するのではなく、電子化した映像や資料を掲載しています。一地方都市の自然、文化、歴史を、ネットを通して閲覧者に広く伝える、まったく新しい形の博物館として、地域の情報発信の役割を担っています。

平成 24 年 4 月、宗像大社の横にある既存の公共施設をリニューアルして、世界遺産のガイダンスのための「海の道むなかた館」が開館しました。宗像市ではじめての博物館ということで市民の評判は上々で、入館者数は 3 年 3 カ月を経た現在、延べ 43 万人に達しました。来館者のなかには、遠く岩手や東京から出かけてこられた人もおります。

「海の道むなかた館」のホームページでは館内の催し物の案内を、一方、「電子博物館」では企画展を開催して、それぞれ新たな地域情報を公開しています。また宗像市の世界遺産登録推進室もホームページを立ち上げて、女人禁制やさまざまな禁忌がある沖ノ島についてくわしく紹介しています。

世界遺産登録への近年のあゆみは上に紹介しましたが、故郷の宗像や沖ノ島を語るとき、忘れてはならない人物がいます。宗像に生まれ育ち世界を舞台に活躍した出光佐三です。百田尚樹著『海賊とよばれた男』のモデルと言われ、「海の道むなかた館」の今春の特別展は、「日本人にかえれ 出光佐三展」と題したものでした。私も地域学芸員としてかかわり、展示物、入場者の感想、主催者のねらいなどについて取材し、電子博物館の新着情報に掲載しました。ご関心のある方は、<http://www.d-munahaku.com> を是非ご覧ください。なお、写真は宗像大社境内にある 佐三書「洗心」です。

(平松秋子@福岡)



// 近況報告① //

私立図書館「本庫 HonCo」-ハコ作りから開館に至るまで

天雲成津子

私立図書館「本庫 HonCo」

秋田市につくった私立図書館「本庫 HonCo」は、“本に遊ぶ”ことを目的とした会員制図書館です。

図書館の定義は様々ありますが、公共図書館では出来なかった本の楽しみ方を追及したいという想いに端を発しています。公共図書館のめざす方向が、幅広い利用層のための図書館サービスにあるとするなら、本を楽しんで読む環境を提供することが一層必要になると考えたからです。

建物には「本・箱の家」という名があり、「本庫」という命名にその意味を反映させています。いつもは箱として閉ざされ、必要な時には箱を開いて地域に公開します。当面は会員限定としながら、本を収めた空間に本好きのメンバーが集まって知的な交流を目指し、特定の日には会員外にも開放する形式で運営することにしました。

会員は「フェロー」と称します。会費を納めた上に、館の運営を当番制で担い、あるときは講師を務めるなど、支援者であるとともに利用者でもある存在だからです。

現在、「本庫 HonCo」は、毎週、月曜日、水曜日、日曜日の10時から18時まで開館していますが、趣旨に賛同するフェローが予想以上に多く集ったことで、運営の見通しが立ち、予定より1年以上も早く開館しました。そのため、今は試行錯誤の期間ともいえます。



図書館作りのはじめ

「本庫 HonCo」設立のきっかけのひとつは、あの東日本大震災でした。当時は「絆」という言葉をしきりに耳にしましたが、どうしたら「絆」を形にできるか、これからどう生きていくかを真剣に考えた末に浮かんで来たのが、自分の手に負える範囲の私立図書館をつくるというプランでした。自分だけの書斎ではない、人びとにも利用していただける図書空間です。

高齢化が進む秋田で、文化に親しむための場は、交通の便利な場所でなければなりません。幸い家族の反対がなかった（止めても無駄と諦めたのでしょう）こともあって、資金の目途をつけ、秋田駅から徒歩8分の場所に図書館をつくることにしました。

図書館の健全な運営にはランニングコストが大きく関わってきます。2万冊の本を収納できる空間は、実用性とデザイン性を兼ねたものにしたいと考え、建築家を捜しはじめました。2013年早春、界工作舎の「箱の家」シリーズを見つけ、建築家の難波和彦氏を知りました。難波氏は偶然にも、放送大学で建築の講座を担当されており、これもご縁といえましょう。

建築現場が秋田という遠方にもかかわらず、難波氏から快諾が得られた後の展開は急でした。しかし設計図ができた2013年の夏以降、思わぬ事態となりました。アベノミクスの影響下、震災復興関連事業の増大による深刻な人手不足、消費税増税による深刻な材料不足への懸念、

加えて東京オリンピック招致が決まり、建築業者がなかなか見つからず、工務店が決まったのはその年の秋の終わりでした。



雪国の冬は、現場工事に多くの制約が発生します。工事は春にもつれ込み、その後もさまざまな紆余曲折を経て、翌2014年の秋、9月6日(土)に「本庫 HonCo」の容れ物「本・箱の家」が完成しました。

当然の事ながら、建物完成イコール図書館の完成とはなりません。開館までには、本を集め、利用に必要な条件を整え、運営方法を決め、周知する作業がありました。そのために、開館までにはゆっくり時間をかけて準備をする心算でしたが、事態は予想外に早く進みました。

便利な場所だけに、これを知った方々から利用希望が舞い込み、秋田出身の舞踊家、土方巽の紹介展示など想定外の要望も寄せられました。

開館へ

2015年4月18・19日の両日をプレ・オープンとして、いくつかの催しを用意し、「本庫 HonCo」を試しに開館したところ、当日は予想より多い希望者が集まり、翌月には、運営準備委員会を設置することになりました。結果として、開館後に運営の仕組みを決めるといった、あわただしさでした。

開館の方法、利用方法、手引の作成、規約作り、施設の使用法の説明、本庫としての活動の記録等々、毎日やることが山積していて、先が見えない思いを抱えながらの日々が続きました。

プレ・オープンから2か月後の6月、開き直って「本庫 HonCo」を本格的に開館すると、さっそく地元の新聞『秋田魁新報』が「本庫 HonCo」の活動を写真入りで紹介してくれました。

7月には、「本の力」と題して、北海道の室蘭から講師を招いた講演会、8月には竿灯祭に合わせて、普通の図書館では不可能なナイト・セッションを企画して大いに盛り上がりました。

気がつけば、夏から秋へと季節が移ろいゆく気配が感じられる今日この頃です。図書館開設に至るこれまでを、お伝えできる機会をもてたことに感謝しつつ、われらがフェローたちの自著が並ぶコーナー(一人一冊と限定)が広がっていくことを想像したりしています。果たしてどうなるかは、これからの流れ次第です。

(天雲成津子@秋田)

(この記事は非公開です)

// 近況報告③ //

最近見た展覧会の話

新井恭子

7月20日、浅草のアサヒ・アートスクエアで、佐藤万絵子さんのライブ・ドローイング「そのメロディに会いに行く、リズムにぶつかる、ハーモニーを触る*」を鑑賞した。

佐藤さんは、アサヒ・アートスクエアで、来年2016年1月9日から30日まで、「机の下でラブレター(ポストを焦がれて)**」と題して、19年におよぶ作家活動で制作したほぼ全点を、インスタレーションとして披露することが決まっている。今回はその前段階的な企画であった。

ライブドローイング(会場制作)は佐藤さんの念願だったという、三層のコントラバスが生演奏する中で行われた。作家は演奏につれて、模造紙のような薄く白い紙を何枚も貼り合わせたものや、厚手の和紙のようなロール紙を、会場いっぱい広げたり、曲げたり裂いたり、時には手にいっぱい紙を抱えながら、壁や柱にはわせて造形し、その間にはチューブやスティックの絵の具で絵を描いていく。身体全体を使って展開する動きは、まるでアスリートか舞踏家のようなものである。

作家は、手足はもちろん、眼、耳、頭、皮膚・・・身体中のすべての器官をフル回転して制作しているに違いない。時間が経つにつれて、作家自身は絵の中に埋没していき、まるで作品自身が作品を立ち上げて行くように感じられる。我を忘れて制作に没頭する作家。我を忘れて見つめる鑑賞者。この時、主客の境界はなくなっていた。

佐藤さんは案内状に同封した、「齋藤徹さん(コントラバス奏者)へのお手紙」で、「私は、音楽を聴きたいのではなく、その音楽が生まれる現場に『立ち合いたい』のです。」と述べている。

佐藤万絵子さんは、自在なコントラバス演奏に触発されながら、1時間余、まさに「絵の生まれる現場」に立ち合せてくれた。

この<ぎらりと光るダイヤのような時間***>に、私は何を持って対峙できるのだろうか? 見終わって、そんなことを思わずにはいられなかった。

(新井恭子@東京)

* <http://asahiartsquare.org/ja/schedule/post/1333/>

** <http://asahiartsquare.org/ja/projects/post/1159/>

*** 茨木のり子「ぎらりと光るダイヤのような日」参照

// 研究情報 //

電子書籍の引用について

諏訪敏幸

※以下は、三無会 ML 記事#429(2015/07/30)より、投稿者の了解を得て抜粋・再掲したものです。

- ＞ 電子書籍(のリーダー)は、私は kindle を利用しており、便利なのが多いのですが、日本語のもので
- ＞ ページの表示がなく(対応する紙媒体のページのことです)、例えば、論文などで引用する場合、どうす
- ＞ だろうと思ったりもします。そもそも、電子媒体のものを研究で使うのが邪道なのか、あるいは、近年は
- ＞ 表記のルールが整備されているのか、ご存知の方がいらっしゃればご教示いただけると幸いです。

論文などで引用する場合、どうするのだろうと思ったりもします。歴史学の一次資料の引用などはページなしが普通ではないでしょうか?ページが無ければ章節などで引用します。

例. http://www.mla.org/style/handbook_faq/cite_an_ebook

質問者さんの分野だと MLA か Chicago が代表的だと思うので、MLA から例を採りました。もしも頭の固いレフェリーが「絶対にページを書かなければだめだ」と言って来たら(たまにそういう困った人が時々いますし、困った投稿規程もあります) unpaginated (not paginated でも同じ)とでも書いておけばよいかと思えます。page(s) unknown とは書かないように(孫引きを自白しているととられかねません)。

＞ そもそも、電子媒体のものを研究で使うのが邪道なのか

邪道ではありません。普通に引用されています。ただし紙媒体と2つあり、引用箇所について同内容なら紙媒体を引用するのがベターです。電子媒体は変更・消滅する可能性があり、安定性に欠けます。

＞ 近年は引用表記のルールが整備されているのか

電子出版物やウェブサイトの引用は1990年代末には ISO で定式化されています。その後、APA、MLA、Vancouver などの主要規程で次々にルールが整備されました。

電子媒体の引用ルールはもう一昔以上前のトピックスです。詳しくは MLA, Chicago, ASA, APA などの規程を当たってみてください。

というわけで、ご心配はいりません。

しかし physical location が明示されていないのは確かに気持ち悪いですね。ページはともかく、Kindle では図書館の書庫ではこりをかぶることもできず、ILL もできません。10年後に読めるかどうか不安です。私としては紙媒体で出してほしいです。

(諏訪敏幸@大阪)

お知らせ

編集担当の取材によれば、6月6日の総会后、これまで当会機関誌の編集長をつとめた人たちを中心に話し合いが行われ、『情報化社会・メディア研究』第12巻の編集長を大野哲弥さん、副編集長を中西裕さんと長澤直子さんが引き受けてくれることになりました。論文、研究ノートの分量、締め切り等については、近々、大野編集長からMLを通じてアナウンスされるということです。

編集後記

放送大学情報化社会研究会も発足以来10年を越えました。この度、「会報」を発行することになり、創刊号をお届けします。今後は隔月発行の予定で、次号は11月初めの発行です。今回は編集・制作担当から、大津さんの「創刊の辞」をはじめ、話題をお持ちと思われる方に執筆をお願いしましたが、次号からは、会員の皆様の積極的な投稿をお待ちします。研究の中間報告、研究資料の発掘話し、講演会、研修会、見学会の提案、身近なトピックス、近況報告など、会員に役立つ情報をぜひお寄せください。かつて関西で行われていた「茶話会」の復活も待たれます。「会報」を通じて会の活性化を図りたいと願っています。(柏倉康夫・志藤聡子)